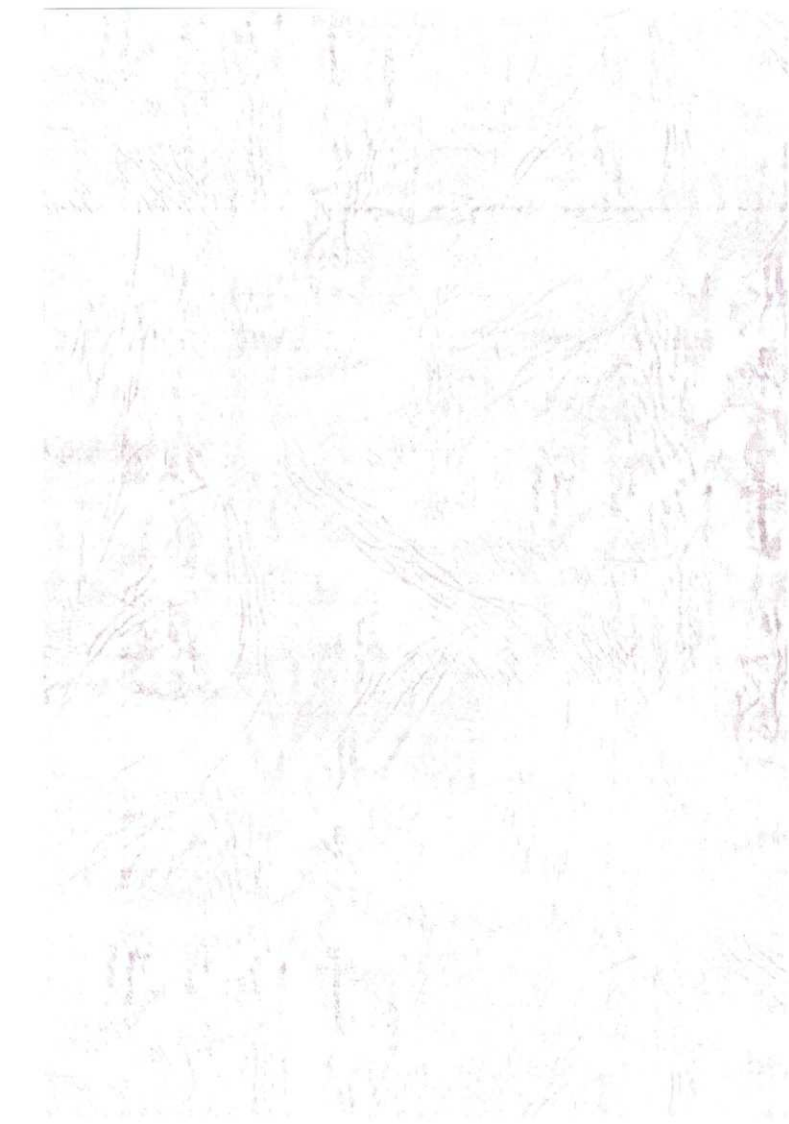


—平成15年度発掘調査報告—

埋蔵文化財調査報告書

2010年3月
兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会



－平成15年度発掘調査報告－

埋蔵文化財調査報告書

2010年3月
兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会

あ い さ つ

福崎町の埋蔵文化財調査の成果は、報告書という形で刊行されていますが、まだまだ未報告のものがあります。平成15年度の調査においては、公共事業に関係するものが見られました。特に、図書館建設予定地での新たな遺跡の発見は福崎町における空白部分を埋める新たな成果となっています。また、本来遺跡があるとは考えられなかった斜面から墓が確認できたことは意義あるものでした。現地説明会などを開催し地域において歴史を伝える取り組みもしてまいりましたが、報告書を刊行し今後の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査においては、関係者各位のご協力を得ることができ、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

福崎町教育委員会
福崎町教育長 高寄 十郎

例 言

1. 本書は、平成15年度に行った試掘・確認調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、団体等の依頼を受け福崎町教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費は国庫補助金を得て実施した。
4. 各年度の調査体制は以下の通りである。

平成15年度

平成21年度

調査事務局

整理事務局

教 育 長 中野 正義

教 育 長 岡本 裕
高寄 十郎

社会教育課長 山口 省五

社会教育課長 山下 健介

社会教育係長 木村 巧

文化財担当 林 彰彦

社会教育課主査 出田 直

調査担当

調査員 出田 直

整理作業は、福崎町教育委員会が行い、梶 智美の補助を得た。健康福祉課 出田の協力を得た。

5. 挿図中に使用している方位は基本的に磁北を示している。
6. 本書の執筆は出田が行い、編集は福崎町教育委員会が行った。
7. 遺構の実測、写真は福崎町教育委員会が行い、遺物の実測・製図、遺構の製図等は梶の協力を得た。
8. 現地調査作業には下記の方の協力を得た。(順不同・敬称略)
西井正実、城井直孝、長谷川義信、山田正英、松岡 正、西井康夫、生田建設株式会社
9. 整理作業に関して下記の方の協力を得た。(順不同・敬称略)
梶 智美、神崎郡歴史民俗資料館、福崎町産業課

目 次

あいさつ・例言	1
目次・図版目次・写真目次	II
平成15年度埋蔵文化財発掘調査一覧	1
平成15年度	
1 西治二反田遺跡	2
2 奥ノ向遺跡	7
奥ノ向遺跡石棺一覧表	17

図 版 目 次

図1 福崎町位置図	1	図13 1号棺（蓋石の状況）	9
図2 調査場所位置図	1	図14 1号棺（棺身）	9
平成15年度		図15 1号棺（展開図）	10
1 西治二反田遺跡		図16 2号棺（平面図）	11
図3 調査場所位置図	2	図17 2号棺（棺身）	11
図4 調査区平面図	2	図18 2号棺（人骨）	11
図5 土層図	3	図19 2号棺（展開図）	12
図6 出土遺物	3	図20 3号棺・4号棺（蓋石）	13
図7 出土遺物	4	図21 3号棺・4号棺（蓋石）	13
図8 出土遺物	4	図22 3号棺・4号棺（棺身）	14
図9 出土遺物	5	図23 3号棺・4号棺（立面図）	14
図10 出土遺物	5	図24 3号棺（展開図）	15
2 奥ノ向遺跡		図25 4号棺（展開図）	15
図11 調査場所位置図	7	図26 石枕（3号棺）	16
図12 調査区配置図	8		

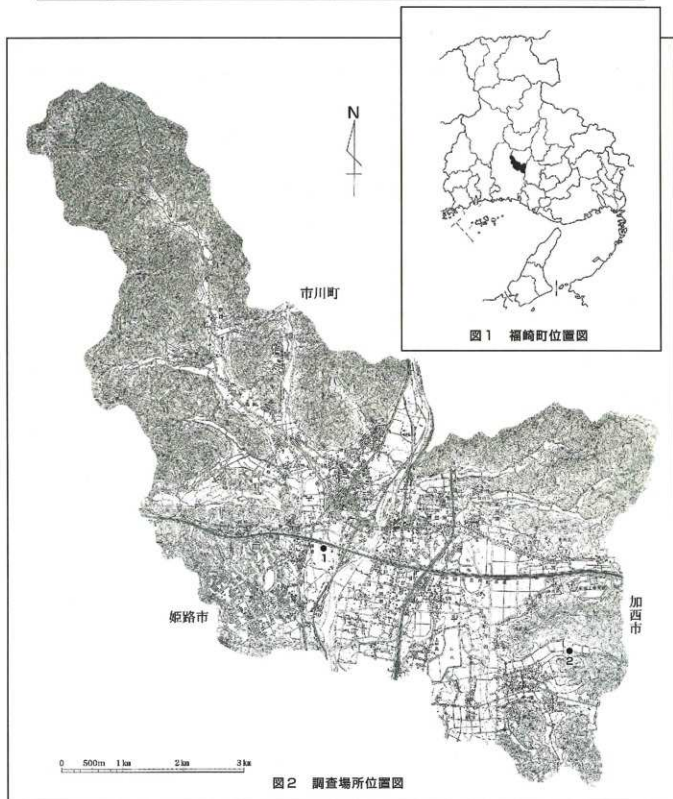
写 真 目 次

図版1 平成15年度	
1 西治二反田遺跡	
図版2～図版16	
2 奥ノ向遺跡	

平成15年度 埋蔵文化財調査一覽

試掘・確認調査

遺跡名	所在地	原因者	要因	調査期間	取扱	時代	遺構	遺物	調査面積	調査確認	報告番号
西治二反田遺跡	福岡町西治字二反田	公共	図書館建設	平成16年2月	工事	弥生中世	包含層	須恵器・土師器・豆か	1箇所 60㎡	確認	1
奥ノ向遺跡	福岡町八千種字奥ノ向	公共	溜池工事	平成15年11月 平成16年2月	工事	古墳	箱式石棺	人骨・菅玉・石枕	100㎡	確認	2



平成15年度

1 西治二反田遺跡

調査地区 神崎郡福岡町西治字二反田
調査主体 福岡町教育委員会
調査担当 出田 直 (福岡町教育委員会)
調査期間 平成16年2月



図3 調査場所位置図

○調査に至る経過

下水道処理施設の建設の際に遺跡が確認されたが、範囲などは不明瞭であった。また、図書館建設が近隣で予定され遺跡の範囲と性格を知る上で確認調査が必要となり、協力を得て調査を行った。

○調査方法

字二反田の地区を調査対象地とし、盛土を重機により掘削し下層は人力で精査した。その際、適宜写真や図面により記録を作成した。

○調査概要

周辺の地理的歴史的環境

現在は、中国縦貫道が北に隣接しているために、従来の地形とは異なる状況になっているように見られるが地形区分上は氾濫原となっている。すぐ東には七種川が南流し西側には西谷川が流れる。上空からの写真や地形図を見ると田の形状から旧河道が読み取れる。この旧河道と考えられる場所意外には微高地と考えられる場所が見られる。

この西治周辺では、古墳以外の遺跡は今まで知られていなかった。西方には円光寺山古墳、円光寺山西古墳、三味谷古墳等の古墳時代後期の小円墳が知られる。寺院では永享12年(1440)創建の天台宗の青龍山観音寺と延宝元年(1673)創建の日蓮宗の妙法山蓮華寺がある。神社では西治八幡神社が鎮座する。西治は、両墓制が近年まで存在し、埋墓と参り墓の二者が存在する。埋め墓は三昧として西治二反田遺跡の南方の高まりに見られる。

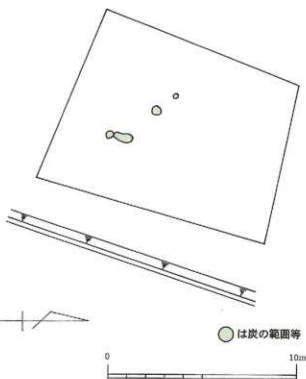


図4 調査区平面図

調査区の概要

土層

調査区の東側から南側にかけては河川の氾濫等に伴う砂礫の堆積が見られるが、遺跡部分では、基盤が黄褐色粘質土（図5の9）となっている。上層から見ていくと、耕作土、床土が見られ、その下

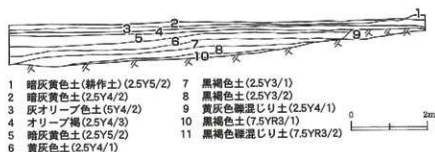
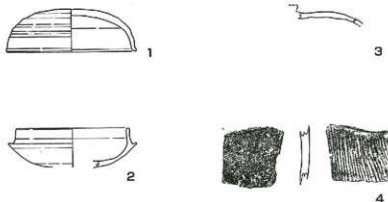


図5 土層図

層では遺物包含層がみられる。図5の5、6の包含層には、平安時代末から鎌倉時代にかけての須恵器や土師器等がみられる。その下層（図5の7）には古墳時代の須恵器を含む層がみられた。また、下層（図5の8）からは弥生時代と考えられる土器も出土した。この中でも一部河川等の氾濫と考えられる砂礫の堆積もみられ、七種川や西谷川の氾濫が幾度となくあったことが伺える。

遺構（図4）

顕著な遺構は見られなかったが、一部焼土と考えられる部分が見られた。（網掛け部分）そこから炭が出土した。



遺物（図6～10）

上層の包含層からは、6-3の須恵器の杯や6-4の甕や6-5の輸入磁器（青磁）が出土した。下層の包含層からは、古墳時代の須恵器の杯身（6-1、2）が出土し6世紀後半と考えられる。

その下層と考えられるところから、図7～図10の遺物が出土している。しかし、遺物が出土する包含層は純粋に分けることが出来るかといえそうではなく、須恵器や弥生土器などの混在も見られるものもある。調査の際に、包含層の掘削を十分に行うことが出来ずに、上層と下層の遺物が混入したことが考えられる。ただし、壁面での確認においては上層と下層に違いが見られ、明確に分けられる可能性はある。

図7は、口縁部が復元できるものを図化した。壺や甕と考えられるもので、7-3のような擬凹線を持つものや7-7のように波状文と端部に竹管文が施されたものが出土している。

図8は、底部で図化できるものであり、底部径2.5～3.6cmの底部が平らなもの8-1、2や底部がくぼむもの8-8、底が平たいもので5.0～8.2cmの大きなものが見られる。

底部がくぼみ高台状になるものとして8-9、10、11があり、底径4.0~11.0cmを測る。底部が出るものとしては8-6、7があり底径3.4~3.6cmを測るもので大きなものは見られない。外面は調整がわかるものは少ないが8-2は、ハケメが見られ、8-4、5はヘラミガキがみられる。

図9は、高杯や壺の体部や土製品で図化可能なものである。

9-1、2、3、8、9、10は高杯の脚部で、9-1、8は円形の透かしが施される。9-3は底径7.7cmを測る。9-9、10は同様の胎土を持つもので端部の作りもよく似ている。端部には擬凹線が施される。同一固体としないのは端部に施された擬凹線の本数が違うことと端部に若干の差異があることからである。

9-7は、高杯の口縁部分と考えられ、口径25.0cmを測る。9-4、5、6は甕と考えられ、4、5にはタキが施される。9-6にはハケメが見られる。9-11は再利用と考えられる土製円板で一部欠損はあるもののほぼ完形である。断面を見ると一部曲がっているところがあり、ここから再利用と考えられる。3.3cmを測る。

図10は、口縁部を分類し図化できるものを集めた。

口縁の端部の形状によりABCDEFの6分類した。細分も出来るが都合上大分類でとどめた。

Aは10-1~7で端部が面をなすものである。10-2、3のように端部に擬凹線をもつものもある。他のものについては、磨耗が激しく不明のものもあるが、何もないものもある。

Bは10-8~15で端部が上下に突出するものである。10-8、9、10、15は擬凹線を施すものがある。調整はナデが施さ

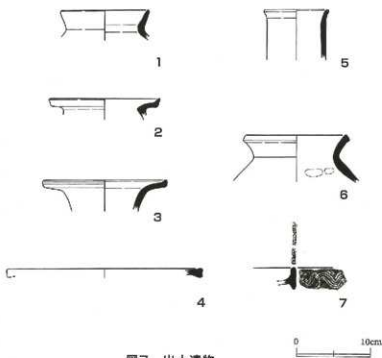


図7 出土遺物

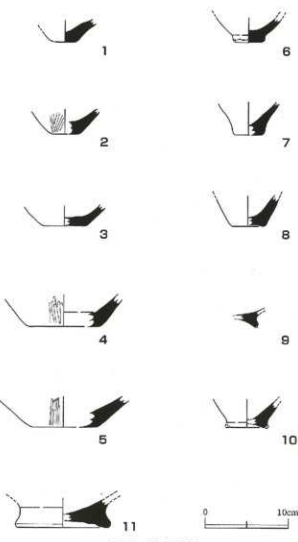


図8 出土遺物

れている。

Cは10-16~21で端部が上に突出するものである。10-17、20、21は擬凹線が施される。

Dは10-22~34で端部が下に突出するものである。10-22、23、24のように顕著なものや10-29~34のように端部の調整の際に下に突出したかのようなものも含んでいる。

前者には、擬凹線等が施され後者には何も見られない傾向がある。10-22は口縁部の内面にも擬凹線が施されている。

Eは10-35~40で丸くおさまるものである。調整は磨耗が激しく不明なものも多いがナデ調整で終わるものが多い。

Fはいずれにも当てはまらないものとした。

口縁部は壺や甕の口縁のものが多いと考えられ、細分することによってそれぞれの器種の口縁とすることが出来ると考えられる。

○まとめ

図書館建設予定地までは遺跡が広がらないことがわかった。この調査区の西側の微高地状の場所に遺跡が広がる可能性が高い。また、包含層や遺物から数度に渡る時代の遺跡が広がる可能性をもつ。しかし、氾濫原という場所に隣接することから、上流部からの流れ込みの可能性もあり、遺跡も北側に存在する可能性も捨てきれない。

今後の周辺の調査の進展をまって遺跡の範囲と性格を明確にしていきたい。

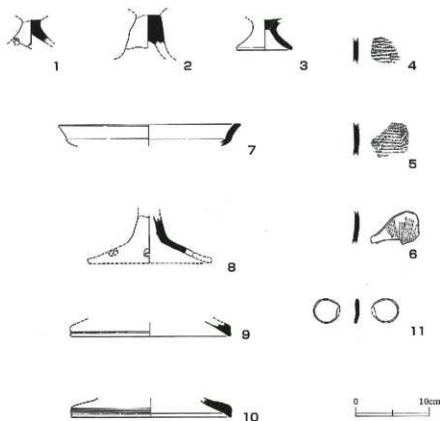


図9 出土遺物

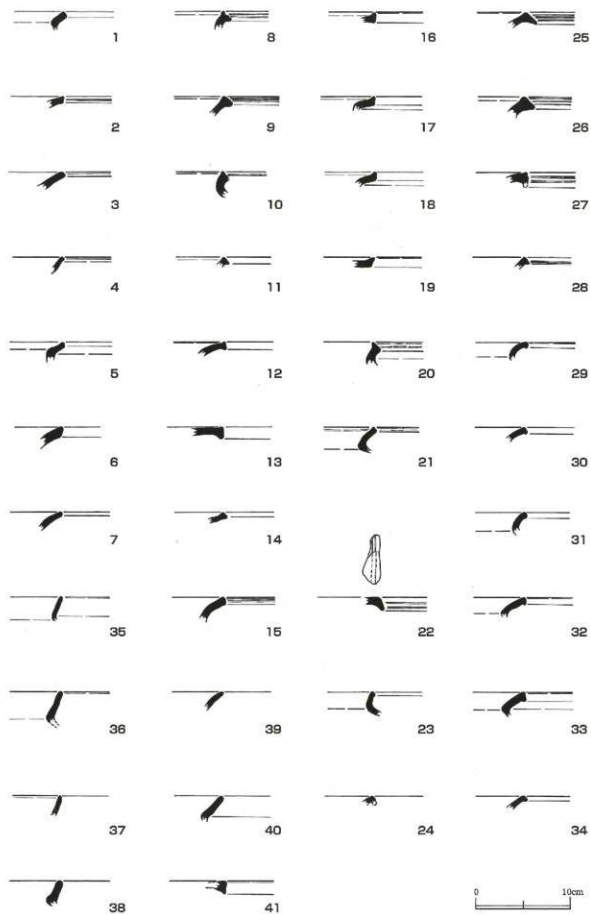


图10 出土遗物

2 奥ノ向遺跡

調査地区 神崎郡福崎町八千種字奥ノ向
調査主体 福崎町教育委員会
調査担当 出田 直 (福崎町教育委員会)
調査期間 平成15年11月
～平成16年2月



図11 調査場所位置図

○調査に至る経過

平成12年度に余田地区の溜池改修における土取り場を字奥ノ向に求めた。その際、遺跡の可能性があるので、確認調査を実施する旨調整した。その結果、重機掘削時に石棺が1基確認され、複数存在する可能性から、電気探査を行った。

電気探査では、4箇所程度石棺がある可能性を指摘された。そのために、その場所を土取り場としては求めず、他の場所にした経緯がある。

しかし、平成15年度新たに余田地区で溜池改修を行う必要性が生じ土取り場を求める必要が出た。遺跡として認識されながらもその場所以外に調整をつけられるところが存在せず、あらためて確認調査を実施し遺跡の有無を確認した。

○調査方法

調査区は電気探査によって確認した場所を石棺があるかどうか確認した。盛土等は重機により掘削し、精査は人力により行い、適宜写真や図面により記録をとった。

○調査概要

周辺の地理的歴史的環境

地形は、住吉山と呼ばれるところに続く丘陵面上に位置する。調査対象地は急傾斜になっており北面に位置することから遺跡の存在は希薄なものと考えられた。しかし、この前面に存する田から以前のほ場整備に須恵器などの遺物が見つかったということを地元の伝承で知りえた。周辺の遺跡としては、ここよりも南側に福井谷窯跡や福井谷遺跡等の奈良時代の窯に関する遺跡が存在し、春日山には、ここの窯で焼かれた鷗尾を棺にした姫ヶ懐古墓が知られている。しかし、古墳などはほとんど知られていないが、石棺の存在が古墳があったことを示唆しており、周辺にも古墳時代の遺跡が存する可能性をもちえている。



図12 調査区配置図

調査区の概要

平成12年度に確認された石棺を1号棺とし、電気探査で確認された場所を4箇所確認することとした。高いところの2箇所（1号棺よりも南の部分）は味噌岩と呼ばれる岩盤であった。次に1号棺よりも低い場所の2箇所は、それぞれ石棺が確認され、それぞれ、2号棺、3号棺、4号棺として調査を行った。

基本的に、石材は山石を用いて石棺を作っており、川原石などは見られない状況である。平たい石を側石として利用し、小口部分には1枚の石を用いている。蓋石も大きな石を数枚用い、つなぎ目はこぶし大から人頭大の石で目地を埋めている。

中には、きれいな土を敷き詰め床を作っている。床石などは用いておらず、棺内の土の上に被葬者を置いていたと考えられる。

1号棺 (図13～15)

西側の一部が欠損していたが、石棺は、内法で全長160cm、幅20～25cm、深さ20cmをはかる。蓋石の数は1枚欠損ながら5枚と考えられる。(図13) 主要な枚数は5枚であるが、それぞれのつなぎ目にはこぶし大から人頭大の石で目地を埋めている。これらの石は、川原石は見られず山石で構成されている。棺の身部分は傾斜の低い方は5個の石で組み合わされ、小口部分は1枚の石で構成されている。傾斜の高い部分は上からの土の流れ込みを防ぐためか、人頭大の石を組み合わせて棺の側石としている様子が伺える。(図15)

ここには、人骨(頭部)が一部残っていたが、他の部位は残っていなかった。(図14) また、副葬品も見られなかった。棺の状況から被葬者は約140～150cmと考えられる。

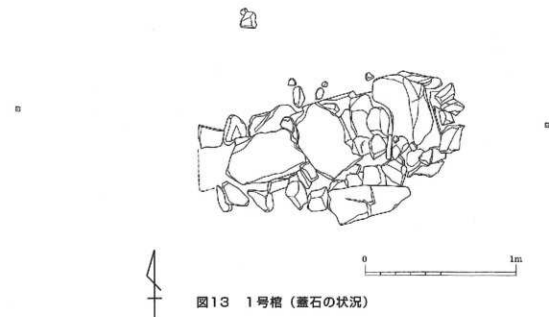


図13 1号棺 (蓋石の状況)

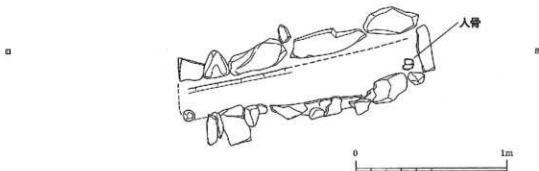


図14 1号棺 (棺身)

243.4

東

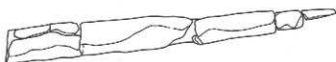
西



243.4

南

北



東

西

243.4



図15 1号棺(展開図)

2号棺(図16~19)

蓋石は、崩落と考えられ不明であった。(図16)蓋石があるところに人頭大の石が積み重なっているが、これらの石は、傾斜の高い部分に組み合わされていた石が崩れたものと考えられる。石棺を作るに当たって、平坦面を作る必要があることから棺身部分が作られるところを平坦にするように掘削されている。傾斜の高い部分に掘り方に該当する掘り込みが確認され高い部分に人頭大の石を中心に石組みを施している。棺身に当たる部分は傾斜の低い部分と同様に平たい石を組み合わせて石棺を構成している。傾斜の高い部分の土の流れ込みを防ぐかのような石組みはこの棺身の上に作られている。他の石棺の作り方を見ると、蓋石は存在しておりこの2号棺だけ蓋石がないのは不自然な状況であり、東側の石の空白状況や西側の石の崩れ方などから蓋石は流出して欠損してしまったものと考えられる。蓋石は傾斜の低い部分からさらに低い部分で崩落跡も確認でき自然崩壊した可能性が高い。(図17)石棺は、内法で全長175cm、幅20~25cm、深さ40cmをはかる。副葬品はここでは確認できなかった。しかし人骨(頭部、脚部)の一部が残り、そこから被葬者は160~165cmと考えられる。(図18)

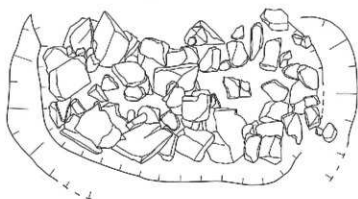


图16 2号棺 (平面图)

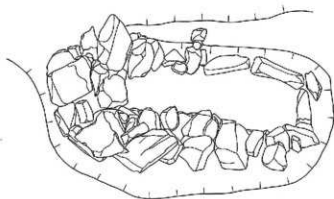


图17 2号棺 (棺身)

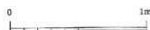
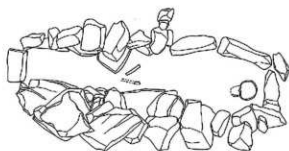


图18 2号棺 (人骨)

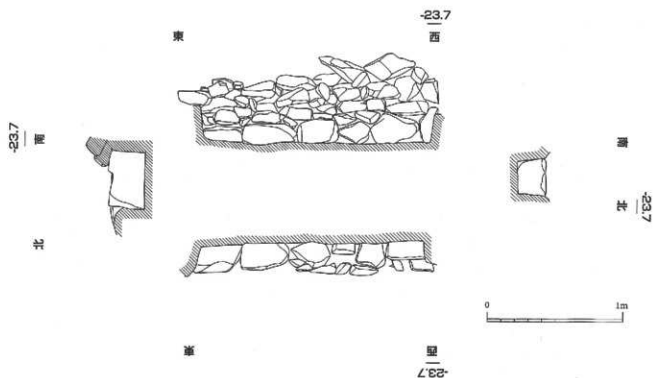


図19 2号棺（展開図）

3号棺（図20～24）

大きな石棺と小さな石棺が隣接して作られている場所があり、大きなものを3号棺すぐ上に4号棺が見られる。石の組み合わせの状況から4号棺より先に3号棺が作られたことがわかる。3号棺を作るに当たっても平坦面を作り出しその上に棺身をつくり蓋石を乗せて棺を構成している。3号棺から傾斜の低い部分に土が流れて棺が崩落するのを防ぐために土止めの役目をしていると考えられる石組みが見られる。（図20）3号棺から土止めの石組みまでの間は平坦面になるように作られている。3号棺の作られ方は2号棺と同様に掘り込みが確認でき掘り方も明瞭に残っていた。蓋石は大きなものを5枚ほど用いており（図21）それぞれの日地を埋めるかのように人頭大からこぶし大の石を詰めている。側石は平たい石を4枚合わせて構成し小口部分は1枚の石で構成している。（図22）石棺の内法は、全長175cm、幅30～40cm、深さ25cmをはかる。東側に2個の石を置き石枕としている。（図26）石枕の周辺に変色した粘土状のものが見られたことから、人骨の一部と考えられた。しかし、残りが非常に悪く明瞭な形での確認にはいたらなかった。また、腰と考えられる部分から青緑色の管玉が1点副葬品として出土した。（図22）

これらから被葬者は約150～160cmと考えられる。

4号棺（図20～23、25）

3号棺の蓋石の上に4号棺の石が乗っていることから3号棺の後に4号棺が作られたことが分かる。（図20）主たる蓋石は4枚用いており3号棺同様に目地を人頭大からこぶし大の石で埋めている。（図21）側石は平たい石を3枚用い小口石は1枚用いている。石棺の内法は、全長90cm、幅25～35cm、深さ40cmをはかる。副葬品は見られなかった。被葬者は約80cmと考えられる。

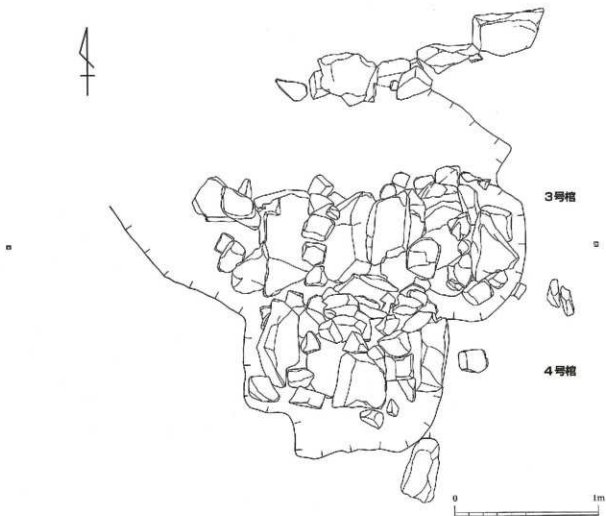


图20 3号棺·4号棺（盖石）

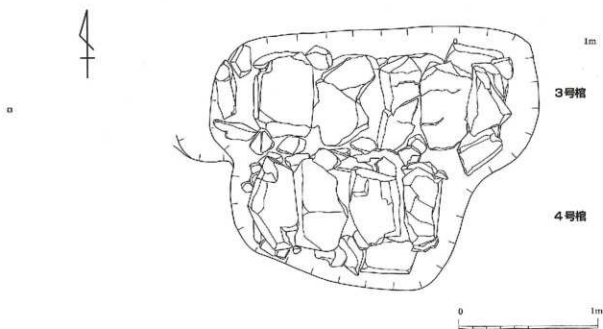


图21 3号棺·4号棺（盖石）

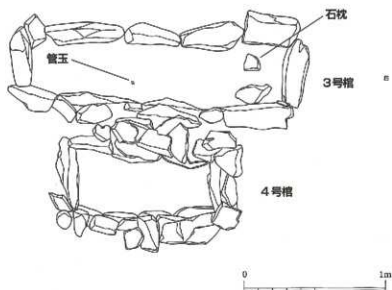


图22 3号棺·4号棺(棺身)

-50

東

西

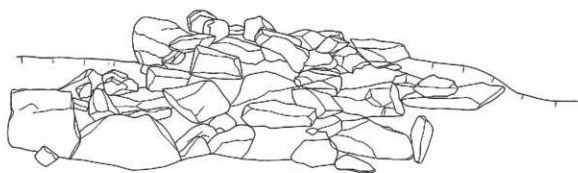


图23 3号棺·4号棺(立面图)

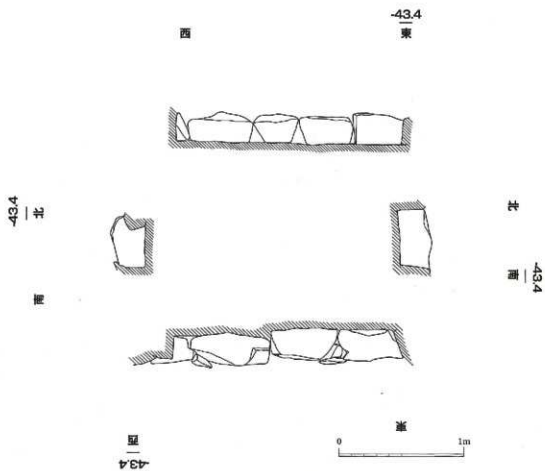


图24 3号棺(展开图)

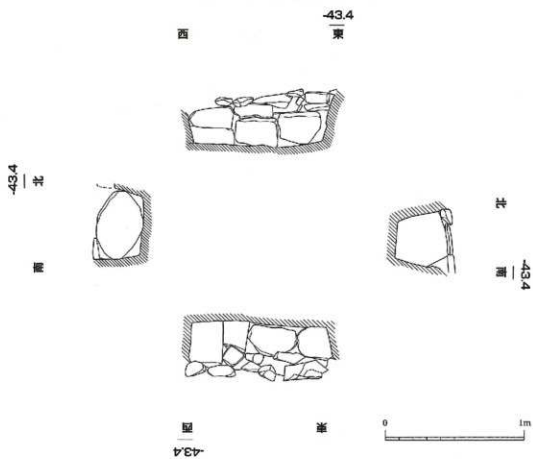


图25 4号棺(展开图)

遺物

人骨

図化は出来ないが、1号棺、2号棺、3号棺から人骨が確認できた。1号棺からは、頭蓋骨の1部が残っていたが、土に接している部分は全て土となっていて痕跡もわからない状況であった。

2号棺からは、頭蓋骨と大腿骨と考えられる足の部分の骨が一部残っていた。これらは、ほとんど土にかえっており頭蓋骨は丸い形が面的にわかるのみであった。また、大腿骨に関しても左右の骨の一部が残るのみで他はわからない状況であった。

3号棺は、頭蓋骨の一部と考えられるが石枕の周辺で土が変色しておりそこに頭骨があったと考えられる。

これらの骨は、全て頭が東側を向く形で残っていた。

管玉

3号棺の中央部、ちょうど腰のあたりから管玉が1点出土した。腰のあたりということで、丁度手首あたりに位置することから、手首に装飾するものとして利用していた可能性がある。左側から見つかったことにより左手首に管玉をつけていた姿が想像できる。ここの石棺群からは3号棺のみ副葬品（装飾品）が見つかった例である。

石枕（図26）

3号棺から石枕が見つかった。被葬者を基準として、左側の石が大きく（26-1）長さ24.7cm、幅16.1cm、高さ7.7cmを測り、右側の石（26-2）は長さ11.4cm、幅9.7cm、高さ7.4cmを測る。これらの設置状況から、頭蓋骨を挟み込み安定させるのに十分な位置にある。丁度、この周辺が土の変色が見られ頭蓋骨があったことが考えられる。

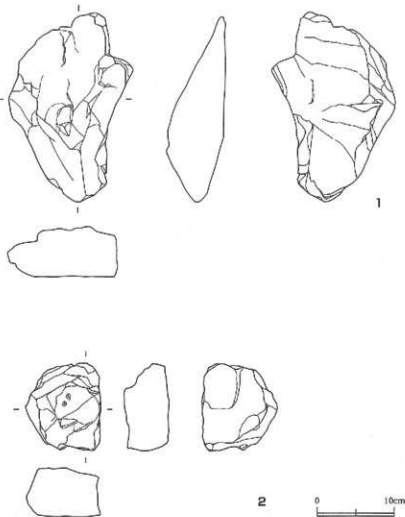


図26 石枕（3号棺）

奥ノ向遺跡石棺一覧表

名 称	(内法) 単位: cm			蓋石の数	出 土 物	単位: cm
	全 長	幅	深 さ			被葬者長
1号棺	160	20-25	20	5枚	人骨(頭部)	140-150
2号棺	175	20-25	40	-	人骨(頭部・脚部)	160-165
3号棺	175	30-40	25	5枚	人骨?、石枕、管玉1点	150-160
4号棺	90	25-35	40	4枚		80

まとめ

奥ノ向遺跡から4基の石棺が確認された。被葬者は一覧表のように140cmから165センチの身長が考えられる。4号棺のみ小型であり80センチの被葬者の身長が想定できる。これらから、1～3号棺は大人の棺と考えられ、4号棺は子どもの棺と考えられる。3号棺の後に4号棺が作られていることや密接して作られていることから、これは親子関係が想定でき、3号棺は他の棺と比べても石枕の存在やわずかといえども管玉を持つということから違いを見せている。その棺に密接して作られているということから、この村の中でも他とは少し違う位置にいる人物の墓と考えることが出来るのではなかろうか。

この奥ノ向遺跡は一種の墓域と考えることが出来、急傾斜でありながらも墓を作っていくことは集落とのかかわりを想定できる。もう少し南にいけば緩傾斜で墓を作るにも作りやすい場所もあるが、そちらの方には今のところ広がる様相は見られない。

ここに作りうる要因として、ここから見える場所のどこかに集落が形成されているのではないかと考えられる。ここの北側には北を背にして広がる緩傾斜の丘陵面があり、そのいずれかに集落が広がるのではなかろうか。遺物の出土などは報告されていないが今後の展開を期待したい。

北風を防ぎ南からの日光を十分に浴びることが出来る場所に集落を作り、その集落を見渡すことの出来る高台に墓を作っているということが考えられた。

出土遺物観察表

H15年度 西治二反田遺跡

地区名	種別	器種	法量 (cm)				色 調	・形 態 ・技 法 ・特 徴	胎 土	焼成
			口径	腹径	底径	器高				
6-1	須恵器	坏(蓋)	(13.5)			4.5	N灰5/0	回転ヘラケズリ ロクロナデ	精 良	良好
6-2	須恵器	坏	(13.6)			残4.1	N灰7/0 断面は紫色	ヘラケズリ ロクロナデ	精 良	良好
6-3	須恵器	蓋				残1.2	灰N6/0	ロクロナデ	精 良	良好
6-4	須恵器	甕				残6.2	灰N6/0	楕状タケキ 同心円文	精 良	良好
6-5	青磁	碗	(13.0)			残4.1	緑灰7.5GY6/1	ロクロナデ	精 良	良好
7-1	弥生土器	甕	(11.8)			残4.1	内：橙7.5YR7/6 外：橙5YR6/8		2mmの砂粒 含む	良好
7-2	弥生土器	壺	(15.0)			残2.9	橙2.5YR6/6		砂礫多く含 む	良好
7-3	弥生土器	甕	(16.8)			残4.3	淡黄2.5Y8/4		砂粒少量含 む	良好
7-4	弥生土器	壺	(26.0)			残1.1	橙5YR7/6		砂粒少量含 む	良好
7-5	弥生土器	長頸壺	(8.5)			残6.8	淡黄2.5Y8/3		砂粒多く含 む	普通
7-6	弥生土器	壺	(14.4)			残6.4	内：灰白2.5Y8/2 外：にぶい橙7.5YR7/4	ロクロナデ	砂粒多く含 む	良好
7-7	弥生土器	壺				残2.9	浅黄橙10YR8/3	竹管紋 波状紋	砂粒少量含 む	良好
8-1	弥生土器	甕			2.5	残3.7	内：橙5YR6/6 外：にぶい橙7.5YR7/4		5mmの砂礫 含む	良好
8-2	弥生土器	甕		(3.6)		残3.0	内：灰白10YR8/1 外：橙2.5YR6/6	ハケメ	砂礫含む	良好
8-3	弥生土器	甕		(5.0)		残2.55	内：橙5YR6/6 外：灰褐5YR6/2	黒斑あり	2mm以下の 砂粒多く含む	普通
8-4	弥生土器	壺		(8.2)		残3.8	にぶい黄橙10YR7/4	ハラミガキ	砂粒・砂礫多 く含む	良好
8-5	弥生土器	壺		(7.6)		残3.7	内：灰5Y4/1 外：にぶい黄橙7.5YR6/4	ミガキ	1mm～3mm 砂粒多く含む	普通
8-6	弥生土器	甕		(3.6)		残3.0	橙5YR6/6		砂粒含む	良好
8-7	弥生土器	甕		(3.4)		残3.9	内：暗灰黄2.5Y5/2 外：橙7.5YR6/6		1mm～3mm 砂粒多く含む	普通
8-8	弥生土器	甕		(4.0)		残3.7	内：黒N2/0 外：にぶい黄橙10YR7/1		砂粒多く含 む	良好
8-9	土師器	壺				残1.9	内：にぶい褐7.5YR6/3 外：灰7.5Y4/1		砂粒少量含 む	良好
8-10	弥生土器	甕		(4.0)		残3.1	橙5YR7/6		1mm～3mm 砂粒多く含む	普通

地区名	種別	器種	法量 (c m)				色 調	・形 態 ・技 法 ・特 徴	胎 土	焼成
			口径	腹径	底径	器高				
8-11	弥生土器	壺			(11.0)	残3.4	浅黄橙10YR8/3		砂礫多く含む	良好
9-1	弥生土器	坏				残3.7	橙5YR6/6		砂粒少量含む	普通
9-2	弥生土器	高杯				残4.1	内：橙5YR6/6 外：灰白10YR8/2		2mmの砂礫含む	良好
9-3	弥生土器	高杯			7.7	残4.2	橙2.5YR6/8		少量の砂粒含む	良好
9-4	弥生土器	甕				残3.5	橙5YR6/6		砂礫多数含む	良好
9-5	弥生土器	甕				残5.2	にぶい褐7.5YR5/3		5mmの砂礫多数含む	良好
9-6	弥生土器	甕				残4.4	内：明褐灰7.5YR7/1 外：浅黄橙10YR8/3	ハケメ	砂粒少量含む	良好
9-7	弥生土器	坏	(25.0)			残2.9	淡黄2.5Y8/3	黒斑あり	砂粒少量含む	良好
9-8	弥生土器	坏				残5.2	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒少量含む	良好
9-9	弥生土器	高杯	(20.8)			残1.8	淡黄2.5Y8/3		砂礫含む	普通
9-10	弥生土器	高杯	(21.8)	幅3.3		残2.6	浅黄橙7.5YR8/3	黒斑あり	砂粒多く含む	良好
9-11	弥生土器	土製円板					にぶい黄橙10YR7/4		砂粒含む	普通
10-1	弥生土器	甕				残1.9	にぶい黄橙10YR6/3		砂粒少量含む	良好
10-2	弥生土器	甕				残1.2	橙5YR6/6		砂粒含む	良好
10-3	弥生土器	甕				残1.8	灰褐7.5YR5/2		砂粒多く含む	良好
10-4	弥生土器	甕				残1.8	橙2.5YR6/6	黒斑あり	砂粒少量含む	良好
10-5	弥生土器	甕				残2.1	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒少量含む	良好
10-6	弥生土器	甕				残2.3	浅黄橙7.5YR8/4		砂粒含む	良好
10-7	弥生土器	甕				残1.95	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒多く含む	良好
10-8	弥生土器	壺				残1.9	内：明赤褐5YR5/6 外：黒褐10YR3/2		砂粒少量含む	良好
10-9	弥生土器	壺				残2.1	橙5YR6/6	凹線紋あり	砂粒含む	普通
10-10	弥生土器	壺				残2.7	明赤褐5YR5/6		砂粒少量含む	良好
10-11	弥生土器	壺				残1.0	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒少量含む	良好

地区名	種別	器種	法量 (cm)				色調	・形 ・技 ・特 態 法 截	胎土	焼成
			口径	腹径	底径	器高				
10-12	弥生土器	甕				残1.4	浅黄2.5Y7/3		砂粒少量含む	普通
10-13	弥生土器	壺				残1.3	浅黄橙7.5YR8/4		砂粒含む	良好
10-14	弥生土器	甕				残1.1	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒少量含む	良好
10-15	弥生土器	甕				残2.6	褐灰10YR6/1	凹線紋あり	砂粒含む	良好
10-16	弥生土器	壺				残1.1	橙5YR6/6		砂粒少量含む	良好
10-17	弥生土器	甕				残1.6	にぶい赤褐5YR5/4	ハケメ	砂粒含む	良好
10-18	弥生土器	甕				残1.6	橙5YR6/6	ハケメ	砂粒多く含む	良好
10-19	弥生土器	壺				残1.05	橙5YR6/6		砂粒少量含む	良好
10-20	弥生土器	壺				残2.4	にぶい橙7.5YR7/3		砂粒含む	良好
10-21	弥生土器	甕				残2.7	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒少量含む	良好
10-22	弥生土器	壺				残1.45	橙5YR6/6	擬凹線あり	砂粒含む	普通
10-23	弥生土器	甕				残2.5	橙5YR6/6		砂粒多く含む	普通
10-24	弥生土器	甕				残0.9	にぶい黄橙10YR7/4		砂粒少量含む	良好
10-25	弥生土器	壺				残1.6	浅黄橙10YR8/4	凹線紋あり	砂粒含む	やや不良
10-26	弥生土器	壺				残2.4	橙7.5YR7/6	凹線紋あり	砂粒含む	普通
10-27	弥生土器	壺				残1.3	浅黄橙7.5YR8/3		砂粒少量含む	良好
10-28	弥生土器	甕				残1.3	橙2.5YR6/6		砂粒少量含む	普通
10-29	弥生土器	甕				残1.8	にぶい橙7.5YR7/4		砂粒ごく少量含む	良好
10-30	弥生土器	甕				残1.6	橙5YR6/6		5mmの小石含む	良好
10-31	弥生土器	甕				残2.4	赤10YR5/6		砂粒少量含む	良好
10-32	弥生土器	甕				残2.0	橙5YR6/6		砂粒少量含む	良好
10-33	弥生土器	甕				残4.6	浅黄橙10YR8/3		砂粒多く含む	良好
10-34	弥生土器	甕				残1.4	浅黄橙7.5YR8/4		砂粒含む	良好

地区名	種別	器種	法量 (cm)				色 調	・形 態 ・技 法 ・特 徴	胎 土	焼成
			口径	腹径	底径	器高				
10-35	弥生 土器	壺				残2.6	浅黄橙10YR8/3		4mmの砂粒 含む	やや軟
10-36	弥生 土器	壺				残3.3	にぶい黄橙10YR6/3		砂粒多く含 む	やや軟
10-37	弥生 土器	壺				残2.1	内：橙5YR6/6 外：灰白10YR8/2		砂礫含む	普通
10-38	弥生 土器	壺				残2.7	内：にぶい黄橙10YR7/3 外：黒褐2.5Y3/1		細かい砂粒 少量含む	良好
10-39	弥生 土器	壺				残2.0	にぶい赤橙10R6/4		細かい砂粒 少量含む	やや軟
10-40	弥生 土器	壺				残2.7	橙5YR6/8		砂粒少量含 む	やや軟
10-41	弥生 土器	壺				残1.4	にぶい黄橙10YR6/3		砂粒ごく少 量含む	普通

图 版

1 西治二反田遺跡



調査前の状況



作業風景



調査区土層



調査区土層



調査区土層



調査区土層



調査区土層



調査区土層

2 奥ノ向遺跡

図版2



調査前の状況



調査前の状況1



調査前の状況2



調査前の状況3



調査区からの遠景



作業員



作業風景1



作業風景2

2 奥ノ向遺跡



検出状況



石の出土状況



石棺 2



石棺 2-1



石棺 2-2



石棺 2-3



石棺 2-4



石棺 2-5

2 奥ノ向遺跡

図版 4



石棺 2-6



石棺 2-7



石棺 2-8



石棺 2-9



石棺 2-10



石棺 2-11



石棺 2-12



石棺 2-13

2 奥ノ向遺跡



人骨 2-1



人骨 2-2



人骨 2-3



人骨 2-4



人骨 2-5



人骨 2-6



人骨 2-7



人骨 2-8

2 奥ノ向遺跡



石棺 2-14



石棺 2-15



石棺 2-16



石棺 2-17



石棺 2-18



石棺 2-19



石棺 2-20



石棺 2-21

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-1



石棺 3・4-2



石棺 3・4-3



石棺 3・4-4



石棺 3・4-5



石棺 3・4-6



石棺 3・4-7



石棺 3・4-8

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-9



石棺 3・4-10



石棺 3・4-11



石棺 3・4-12



石棺 3・4-13



石棺 3・4-14



石棺 3・4-15



石棺 3・4-16

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-17



石棺 3・4-18



石棺 3・4-19



石棺 3・4-20



石棺 3・4-21



石棺 3・4-22



石棺 3・4-23



石棺 3・4-24

2 奥ノ向遺跡



石棺3・4-25



石棺3・4-26



石棺3・4-27



石棺3・4-28



石棺3・4-29



石棺3・4-30



石棺3・4-31



石棺3・4-32

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-33



石棺 3・4-34



石棺 3・4-35



石棺 3・4-36



石棺 3・4-37



石棺 3・4-38



石棺 3・4-39



石棺 3・4-40

2 奥ノ向遺跡



石棺3・4-41



石棺3・4-42



石棺3・4-43



石棺3・4-44



石棺3・4-45



石棺3・4-46



石棺3・4-47



石棺3・4-48

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-49



石棺 3・4-50



石棺 3・4-51



石棺 3・4-52



石棺 3・4-53



石棺 3・4-54



石棺 3・4-55



石棺 3・4-56

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-57



石棺 3・4-58



石棺 3・4-59



石棺 3・4-60



石棺 3・4-61



石棺 3・4-62



石棺 3・4-63



石棺 3・4-64

2 奥ノ向遺跡



石棺 3・4-65



石棺 3・4-66



石棺 3・4-67



石棺 3・4-68



石棺 3・4-69



石棺 3・4-70



石棺 3・4-71



石棺 3・4-72



石棺3・4-73



石棺3・4-74



石棺3・4-75



石棺3・4-76



石棺3・4-77



石棺3・4-78



石棺3・4-79



石棺3・4-80

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年度発掘調査報告

平成22年(2010年)3月31日

編集発行 福崎町教育委員会

〒679-2280

兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1

TEL 0790-22-0560

印刷 クリヤ印刷所

〒671-1116

兵庫県姫路市広畑区正門通4丁目2-9

TEL 079-236-3679



